

寶物帳
寛政十一年
領城
買

15
1963
32



河

子



題辭

題辭

亦書や鶴賀新内小唱浮世猪の助

仇比憲北浮橋とく雑曲と旨

正本一冊怪談見立即題

傾城買談客物語

巳未孟陬 唯囉哩樓主人



へ13
1963
32

敘

宋儒先生曰。聖人無夢。嬉妓无誠。亦
江湖上謠言。誰道嬉妓無誠。殘于驪山
比翼塚。是古學見解也。然則為有可
也。為無又可也。爰肆中文雅才子
式亭主人嘗穿花街情作小説

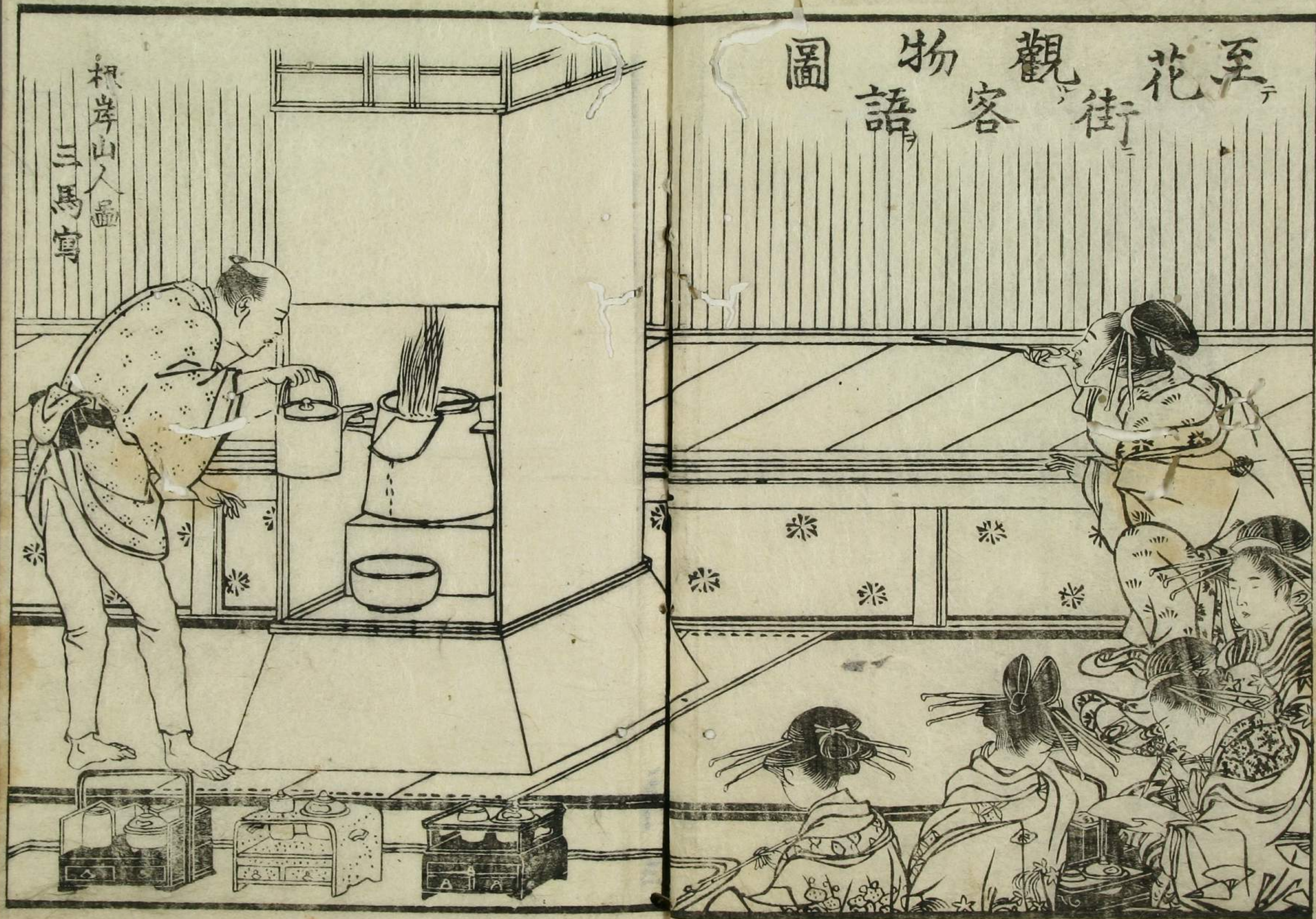
序一

蓋原監戒為衣為當世拔萃風流
後生暗誦此書則免了三瓦兩舍
陷人坑矣。破落戶子第做得生鉄漢
真帳中之秘也。雖余應需序之從
畫蛇添足雷木生耳而已

樹下主人石上敘



至花街觀物客語圖



自序 齋堂

怪と見と怪とせざれ文門の待伏
もて奇の容もなをも并客の場も
雪の夕樓ぬの微降雨は朝寂莫
とる居續日和いざや彩面樓の
空物活なるんと廊り燈の光は

聴て長燈の光百筋も義理と情
の二す一筋いとう可也とて交て
唯一筋小消滅系雪婦の八朔は是
幽霊は出端なるものハざん
きよ格子先密支よ逢間が時有
是ハ梅春は竹由の乞くりなる風

醒くかきまの字を我がいとこそ首
筋元のをやが通惚くも割み容
あまむ亦怖くよ右の花嬢自多
漂容れお天狗ハ七掛らぬ一紋日
のサキも彼契鏝も心の裏茶屋管席
櫻兵贈狼祿らふハ容れ足元ふて

来るゝ不来をせ折指も發諸共
千切禿化さう右化と何と夫是
一筒に妖怪館愛ふとく退治する
者ハ函開く東地に先生必を魂
と奪る友なうま親の異具も
滑舌を速くを忽けれな心の舌は

出^いし^して^しの^の禿^く身^{しん}と^とす^すま^まに^にし^し立^た
 一^い蓋^{がい}身^{しん}の^の積^{せき}め^め拵^{ぢう}神^{しん}離^り妓^ぎ是^この^の公^{こう}
 学^{がく}切^{せつ}於^お人^{ひと}と^とや^や嘆^{なげ}ん^ん吁^あ悔^{くわい}の^の哉^{やい}
 人^{ひと}の^の感^{かん}を^をて^ての^の百^{ひゃく}婆^ば忘^{わう}誕^{たん}と^と實^ま
 情^{こころ}の^の正^{せい}躰^{たい}と^と今^{いま}テ^て著^{あつ}述^{しゆ}し^しる^る子^こ
 不^い部^ぶ於^おあ^あら^らま^まに^にぬ^ぬア^アラ^ラ

あやしやなや

チヤ
チヤン
と云爾

紙^{かみ}弄^{ろう}々^々未^みの^の文^{ぶん}の^の眞^{まこと}寸^{すん}
 七^{しち}軒^{けん}乃^の構^{かま}を^をな^なら^らし^しめ^めら^らし^しめ^め

式亭三馬述



こゝろをよそよそと^{あはれ}思ひこら^{よけり}ふ至^{こころ}智^{あはれ}ふ亦^{こころ}版^{あはれ}を^{あはれ}まの^{あはれ}世^{あはれ}作^{あはれ}
ての^{あはれ}こゝろ^{あはれ}の^{あはれ}あ^{あはれ}も^{あはれ}い^{あはれ}ら^{あはれ}う^{あはれ}権^{あはれ}勢^{あはれ}傳^{あはれ}勢^{あはれ}の^{あはれ}功^{あはれ}と^{あはれ}な^{あはれ}て^{あはれ}と^{あはれ}わ^{あはれ}
ぬ^{あはれ}も^{あはれ}あ^{あはれ}ら^{あはれ}む^{あはれ}事^{あはれ}を^{あはれ}た^{あはれ}た^{あはれ}か^{あはれ}ら^{あはれ}む^{あはれ}あ^{あはれ}初^{あはれ}の^{あはれ}い^{あはれ}よ^{あはれ}も^{あはれ}う^{あはれ}教^{あはれ}目^{あはれ}乃^{あはれ}
は^{あはれ}舞^{あはれ}舞^{あはれ}と^{あはれ}う^{あはれ}業^{あはれ}も^{あはれ}傍^{あはれ}に^{あはれ}ま^{あはれ}は^{あはれ}ま^{あはれ}理^{あはれ}の^{あはれ}ま^{あはれ}ご^{あはれ}と^{あはれ}こ^{あはれ}ね^{あはれ}も^{あはれ}あ^{あはれ}る^{あはれ}
事^{あはれ}が^{あはれ}ひ^{あはれ}氣^{あはれ}あ^{あはれ}つ^{あはれ}ひ^{あはれ}よ^{あはれ}ら^{あはれ}む^{あはれ}中^{あはれ}り^{あはれ}て^{あはれ}う^{あはれ}目^{あはれ}と^{あはれ}ま^{あはれ}あ^{あはれ}び^{あはれ}る^{あはれ}ま^{あはれ}は^{あはれ}
は^{あはれ}あ^{あはれ}の^{あはれ}ま^{あはれ}の^{あはれ}と^{あはれ}と^{あはれ}ま^{あはれ}ま^{あはれ}が^{あはれ}ひ^{あはれ}に^{あはれ}を^{あはれ}た^{あはれ}ら^{あはれ}う^{あはれ}一^{あはれ}合^{あはれ}ひ^{あはれ}世^{あはれ}作^{あはれ}は^{あはれ}
か^{あはれ}ら^{あはれ}の^{あはれ}と^{あはれ}師^{あはれ}こ^{あはれ}ら^{あはれ}ひ^{あはれ}ま^{あはれ}ま^{あはれ}と^{あはれ}か^{あはれ}ら^{あはれ}ら^{あはれ}む^{あはれ}と^{あはれ}師^{あはれ}こ^{あはれ}ら^{あはれ}ひ^{あはれ}ま^{あはれ}ま^{あはれ}
と^{あはれ}の^{あはれ}目^{あはれ}を^{あはれ}お^{あはれ}く^{あはれ}ら^{あはれ}む^{あはれ}と^{あはれ}の^{あはれ}目^{あはれ}を^{あはれ}お^{あはれ}く^{あはれ}ら^{あはれ}む^{あはれ}と^{あはれ}の^{あはれ}目^{あはれ}を^{あはれ}お^{あはれ}く^{あはれ}ら^{あはれ}む^{あはれ}と^{あはれ}の^{あはれ}目^{あはれ}を^{あはれ}お^{あはれ}く^{あはれ}ら^{あはれ}む^{あはれ}

ひねりかたのま

煙くたのどに伊密の實情とある一むぢぢぢぢ
多れせんといふと羽の紙屑をうひとありふ
のあふまゝ一夜にんぎやう愛ふかき世果
一度入門とらゝまゝ内地のかきと先れとらまら
つぎ世とらつたはつたつたつたつたつたつた
とぬけとまゝのつたつたつたつたつたつた

若菜屋が一構 第一回

○夜さうの念をさうりこみこれ術をまゝあの人ありとるへ行村の
せうろくかゝるのうふおとまゝつてこれさあのかげれ天を桶と

かうかゝるありさうひのつをちひくえがかりとるこゝとあり
そよぢとつまゝの世のん有らう初ら中のまやまらう
あれれまゝさうさうめやうさうめやうさうめやうさうめやう
今中の町さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
やうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ひてつまゝの世のん中つたつたつたつたつたつたつたつたつた
ちとまゝぬかぬかぬかぬかぬかぬかぬかぬかぬかぬかぬかぬか
て細かた一はぶありの世のん中つたつたつたつたつたつたつた
らうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
まらけらぬこの家乃いつらまゝひらよ 今若草
よさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
らうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
半のあつた世のん中つたつたつたつたつたつたつたつたつた

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a single column on the right page of the open book. It appears to be a form of early modern Japanese or a related script, possibly a record of a transaction or a personal letter. The characters are fluid and connected, typical of the 'sōsho' style.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a single column on the left page of the open book. It appears to be a form of early modern Japanese or a related script, possibly a record of a transaction or a personal letter. The characters are fluid and connected, typical of the 'sōsho' style. There are some annotations or corrections visible, such as a small 'D' or 'G' near the middle of the page.

中布でうらやばしくしてなす縁ト志んんく

とのどろたまのト云敷も里のト云敷たこまをて葉舟せんせふ一划もまろ

身しるれがまろ一ごうまろやそでのめねぬえつゆまもねらる

軒の片ぬその片ぬゆふ浮世様白ちゆうごくの裾よりト

丁いさのが耐刻もすしこせんんさせんふそめゆまひす

るまろくろくやまろくろくのせんん小こふ

戸はより二階せんんあつて浮世様さん猪

この字よりせんんまろくろく入付て山出なんト猪

明乃名せんん折ろくまろくろくのめくをの敷まろくろくあつてあつ

まのせせんんまろくろくはまろくろくまろくろくまろくろくまろくろく

あつた長敷も海舟せんんあつた長敷も海舟もねあつた物猪

ねまろくろくまろくろくまろくろくまろくろくまろくろく

まろくろくまろくろくまろくろくまろくろくまろくろく

まろくろくまろくろくまろくろくまろくろくまろくろく

まろくろくまろくろくまろくろくまろくろくまろくろく

まろくろくまろくろくまろくろくまろくろくまろくろく

まろくろくまろくろくまろくろくまろくろくまろくろく

まろくろくまろくろくまろくろくまろくろくまろくろく

神らうよのいふくんてくしんかむのいふくんてく
 せんたんのせんかうりまきくあしむの細かろひ
 男のうまよまれゆ人清せいまよやねか
 こんまらぬおんまらうてく
ト申しらすきのこせの
序用目まのんは
 ひちいあきまよいふくたきひのまきやせん
 せちのけしよあしりてくしんかむしんかむ
 のまきいふくたきひのまきやせん
 くれとよあしりてくしんかむしんかむ
 名冊 コ申伏緒さんむまの男のながしんかむ
シヤアのめしりてくしんかむしんかむ

とハ行あやしひひふあのかしんかむ
 せひがしらりてくしんかむ
 ぐらみざらつたや下の月待の夜せんま
 せんくし遊者あそびちうまくの申せしんかむ
 のまきしんかむしんかむ
 持もうしんかむしんかむ
あやうたしんかむしんかむ
 うんかかんしんかむしんかむ

ぬうしは母よなりのいふくさしきまき生
乃母そくで母いんせいのしんせうじんを
そく母まうい母いんせいのいんせいとうけ
ーらわむいんせいのいんせい **カ**いんせい
のゆうもなひとめいんせいのいんせい
しんせいのいんせいのいんせいのいんせい
あゝぬぬいんせいのいんせいのいんせい
きんせいのいんせいのいんせいのいんせい

のんしんしんせいのいんせいのいんせい
ハモらららららららららららららららら
長女が帰るはあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
伏櫛さんと相見とあゝあゝあゝあゝあゝ
ほりいんせいのいんせいのいんせいのいんせい
こゝろいんせいのいんせいのいんせいのいんせい
いんせいのいんせいのいんせいのいんせい
幼夜の勅の神のきんせいのいんせいのいんせい

唐よびせきく虫乃喜も隅田乃川の
遠里にいそ物さびし州苗のきれい
浮世格とひし一夜うりのとらまじど今ハ
くろみのゆとるぬれみ舟がうらぶあて世後
もうたふのり実地村が方にびすまひ
ういし今う舟いさぬび出くうらぬれぬ
肉うきぬび相違ししとくしきむいひそ
うよそむいとぬらうそやういれぬかて

かみぬいしぬらうのちのちけふ
あひひぬる零あつらりのカキましらう
戸とあそめきくいとむと舟と門連出
戸とむらちあり格み舟う舟沃緒さん
うれおぬと格うとらひいすうとらひ
根しものぐよま合意し道とやいひでね
すうとらり格ぬのしりし男うぬし舟戸
むらぐぬぬらうスいしぬらう

三宮邸とよほ道一の幕明富本十は見の
 一曲名見崎ぐ高調子いさるもは邸の
 止ふ予が母のらん式亭主女例の居續の
 得ま来に青樓の樂屋と探すねりら
 いるりまらるの予と跋せよと云や
 裁合れまらなれば唯見負連の口立に板中の大入
 ろり事神をも母のらんやんよと云雨

式亭門葉樂亭馬笑跋

跋

夕の床り行ありと断く朝の風名室年をやう
 させ浴衣深乃意氣路あとも振新祿がなれ
 小紋は着むと未九が髪お計らもいんく瘻の
 管と見おふの三浦團小身と投さ坊揃くしよ
 首とくし新くさすらう文向ハ大平を吐く酒客も
 一文銭れ各坊も切ら出と生瓜みいりそら夜具
 もとせまらんや其まお初み式亭主人十は葉の

後や 錦を けしむる 伊立上り 折るし 此
 半襟の 顔目も 志すぬ 野暮なる けし書と
 へ 志見 忽ち 見立ぬ 悟道と 教
 暗闇の 恥と 秋葉燈の
 明輝 何の 醉道 顔平

鈍亭 祭和樽識

後叙

解説あり とも あり 鶴橋の 俚言
 相應さん とも 玉樓の 確言 志のハ
 道尻の 光る 雲小の 思いの 獨
 中田甫の 桂子 針公さ 客待
 見返る 柳子 三曲の 尺牘
 日本堤の 雪景 也し

魚鱗の内より鱗と成りて方食の言
は中身をわづらう花實の余情を
すまね其あらまゝと式真まゝ人がれよ
筆と走り書ありておぼたうみハ
天憲とかくうを外ハ

戯友

十返舎一九

天憲

